

2025年11月16日

「はじめてのキリスト教」説教要約

人が味わう苦悩

(ヨブ7・1～21)

一、ヨブを襲った試練

ヨブ記が指定されたので、改めてヨブ記を読んでみました。全部ではありません。4章から9章くらいまでです。そうしますと、あることに気づきました。試練の中にあるヨブを諭そうとしたエリファズ、ビルタデが、神のことをまことしやかに語っているのですが、神を見ているようで見ておらず、ヨブのことばかりを見ているという姿でした。一方のヨブは、エリファズやビルタデに「答えている」というかたちをとりつつも、ヨブが語りかけているのは神ご自身であったという姿です。

さて9節に**雲は消え去ります**。そのように、**よみに下る者は上っては来ません**。という、ヨブが語ったことばが出てまいります。ここに、アブラハムの時代以降、紀元前2世紀頃まで続いたユダヤ人の死生観が表れています。死はすべての終わりであって、人は死んだら陰府の世界、言い換えるなら地下の世界に行くという死生観です。そういうわけで、その時代のユダヤ人たちは、生きていることがすべてでした。死後に希望を持つことはできなかったからです。

ですが紀元前2世紀頃に変化が現れました。死んだラザロと、マリアの姉であったマルタが、イエスさまに語ったことばに表れています。〈ヨハネ11・24マルタはイエスに言った。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」〉がそうです。それまで、人は死んだら陰府に下ると受け止めていたユダヤ人に変化が現れています。理由は、ペルシアの宗教の影響であったと言われています。私は、「影響」も然る事ながら、元々あったヤハウエ信仰がペルシアの宗教に刺激されて、そのように「脱皮」したものであったと受け止めています。ところがイエスさまは、当時のユダヤ人が度肝を抜かすことを語られました。〈ヨハネ11・25・26イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえります。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」〉と。この出来事以前に、こんなことも語られています。〈ヨハネ6・40わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです。〉と。

キリストはご在世当時、すでに死の先のことを見ておられたことが分かります。

ヨブは**雲は消え去ります**。そのように、**よみに下る者は上っては来ません**と語っています。「自分のいのちが終わったときに、私は陰府に下る。であるなら、私の人生はいったい何だったのか」という世界観であり、人生観です。

二、人生における試み

赤ちゃんが生まれた時を人生の出発点と考えるなら、人によってかなりの格差があります。こればかりは、受け入れるしかないと思います。

ヨブが重い皮膚病らしき病に冒されたのは、ヨブが虚弱体質であったからとは決めつけられません。ヨブ記においては、プロローグで、主からの許可を得たサタンの働きであると解説されています。ですがこれは、ヨブ記本文よりも後に加えられた解説であると、私は理解しています。現実の出来事は、一日のうちに家族を失い、その後、重い皮膚病らしき病に冒されてしまったことです。こればかりは、ヨブには防ぎようのないことでした。私たちも同じです。人生には防ぎようのない、試練がやってまいります。もちろん試練なんかには遭わない方がよいと思います。「主の祈り」にも**「我らをこころみにあわせず、悪より救いだし給え」**とあるくらいです。ですが、やってきてしまったものについては、それを受け止め、受け入れるしかありません。

三、苦悩の意味は変わる

神の子イエス・キリストは、十字架の上で叫ばれました。マタイの福音書27章46節です。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。私は、イエスさまが十字架上で叫ばれたことばは、マタイとマルコが史実に近いと受け止めております。そうしますと、イエスさまが最後に叫ばれたことばは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」だったということになります。私たちと同じ肉、すなわち人として生まれられた神の子イエスさまが、最後に叫ばれたことばは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」でした。私たちに適用するなら、「神さま、どうしてあの子は助からずに死んでしまったのですか」「神さま、祈っていたのに、どうしてこの子はハンディキャップを持って生まれたのですか」に通じるものがあると思います。考えてみれば、罪のない神の子イエスさまが、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と祈られたのですから、自分の願ったようにならなかったとしても、それを受け止めて行くのが、キリストを信じる信仰者の歩みかと思えます。